

## 『英和对訳袖珍辞書』の文法関係邦訳語の考察

三好 彰

キーワード： 英和对訳袖珍辞書 文法 品詞

### 要旨

幕末に日本で最初に市販された英和辞書である『英和对訳袖珍辞書』に出ている文法関係の邦訳語と品詞の邦訳語には整合が取れていないのが散見される。それは本辞書の編纂者の英文法に関する理解が一樣でなかったことを示している。そしてこれらの邦訳語が校正段階で改訂された状況を見ると、編纂者は英語力に差のある3つのチームから成っていてリレー形式で連携しながら本辞書の完成度を高めて行ったと考えられる。

### 1. はじめに

現在なら文法と訳す邦訳語が『英和对訳袖珍辞書』では「文学、文学、文典、文語」と多様に訳されていること、そして現在の名詞の同義語として「實名辞、實名詞、名辞、名詞、実詞」が使われているように品詞の邦訳語に統一が取れていないことから本辞書の編纂者の英文法の理解が一樣でないことを先ず示す。そして若手から中堅そしてベテランから成る編纂者の3つのチームがリレー形式で連携して本辞書の完成度を高めて行ったことを解き明かすのが本稿の目的である。

#### (a) 筆者の『英和对訳袖珍辞書』への取り組み

幕末に日本で最初に市販された英和辞書である『英和对訳袖珍辞書』について筆者はこれまでに次のことを明らかにしてきた。

- (1) 本辞書の編纂が開始された時点の底本はH. Picard辞書の初版(1843年刊)であったが、途中でH. Picard辞書の再版(1857年刊)に切り替えた(三好彰 2007)。
- (2) 本辞書の底本であるH. Picard辞書の編纂者はオランダ人のHendricus Picardである(三好彰 2008a)。
- (3) 本辞書と蘭和辞書『和蘭字彙』の関連性は薄い(三好彰 2008b)。
- (4) 本辞書で取り上げられている英語の例文にはオランダ語を介さずに英語から直接訳したのがある、および外国語の音をカタカナで書き下だして邦訳語にしているものの大半が英語の音に拠っておりオランダ語の音に拠るものは僅少である(三好彰 2009a)。
- (5) 本辞書の改正増補版(慶応3年版)には文字通りに羽織の袖に入るサイズのものがある(三好彰 2009b)。

(6) 改正増補（慶応2年版）にはいくつかのバリエーションがある（三好彰 2010）。

(7) 本辞書の校正をした小城藩士の宮崎元立は後に洋書調所に招聘された（三好彰 2011）。本稿はこれらの論考を踏まえて編纂体制を考察するものである。

#### (b) 本稿における『英和对訳袖珍辞書』の版

『英和对訳袖珍辞書』の初版（堀 達之助編（1862））は文久2年（西暦 1862）に出版され、慶応2年（西暦 1866）に邦訳にかなりの改訂を加えた改正増補版（堀越 亀之助編（1866））が出た。その後も慶応2年版の英語部を木版にしたものが慶応3年と明治2年に刊行されたが、本稿では幕末での洋学の事情を探るために文久2年版を軸として論じ慶応2年版で補足する。

ところで高崎市在の古書店主・名雲純一が本辞書の初版の手稿の一部と改正増補版の校正原稿の一部を2007年初に発見した（名雲純一編 2007a）。手稿の中に蕃書調所の刻印のある用箋があり震え上がったと氏が述懐しているように奇跡の発見であったが、校正のため朱に染まっている手稿は本辞書の出自の謎を解くヒントを与えてくれるのでこれも活用する（名雲純一編 2007b、堀孝彦・三好彰 2010）。

#### (c) 『英和对訳袖珍辞書』の書誌情報

参考までに『英和对訳袖珍辞書』初版本（文久2年（西暦 1862）刊）の書誌情報を記す。

サイズ：横 19センチ、縦 15センチ、厚さ 4センチ

用紙：洋紙ないし鳥の子紙

印刷技法：英語部は活版印刷で、日本語部は木版印刷。

製本：糸かがりとし

版元と出版母体：編纂を開始した時の蕃書調所は出版時点では改称されて洋書調所

出版地：江戸

発行年： November, 1862（文久2年）

刊行から一世紀半経過しているためであろうが現存するものの装丁にばらつきがある。特に表表紙と裏表紙は同じものが無いほどに異なっているので出版後に改装されたと考えられる。また用紙が一種でないうえに手で裁断されたためにサイズは一冊毎に少しずつ異なっているので表紙を除いた本文のサイズを平均値で示した。

改正増補版（慶応2年刊）もほぼ同じ装丁である。なお日本語部の木版は初版のものに改訂内容を盛り込んで明治2年版まで使われた。

## 2. 文法を意味する多様な表現

現代では英語 Grammar の第一義的な邦訳は「文法」であるが、『英和对訳袖珍辞書』には「文幸」、「文学」、「文典」と「文語」も使われているので例とともに記す。

### 2.1 文幸、文学、文典、文語と文法

(a) 文法の意味の文幸、文学と文典

『英和对訳袖珍辞書』の英語見出し語 Grammar の邦訳は文久2年版、慶応2年版ともに「文幸、文典」である。

「文典」は『英和对訳袖珍辞書』に先行して蘭学にいっつかの和蘭文典があり、英学に『英吉利文典』があるので Grammar の邦訳として「文典」は分かり易い。

問題は「文幸」である。文幸は現在なら Grammar ではなく Literature の意味である。そして『英和对訳袖珍辞書』で英語 Humanist の邦訳は「文幸者」となっているが英語 Humanist に文法の意味はないので、この「文幸」は Grammar ではなく Literature の意味である。

ところで幕末の洋学は蘭学の影響を強く受けている。とりわけ『英和对訳袖珍辞書』の邦訳語は和蘭辞典なかでも『和蘭字彙』(桂川甫周編(1858))に依存する度合いが強いと専門家も見ている(森岡健二編著1960:38-55、Daisuke Nagashima 1993)ので、英語 Grammar に対応するオランダ語 *Spraakunst* を『和蘭字彙』で見ると「文學」となっている。ちなみに現代のオランダ語辞典(日蘭学会1994)では *Spraakunst* の邦訳は「文法、文法学」である。そして英語 Literature に対応するオランダ語 *Letterkunst* を『和蘭字彙』は「文學」としている。

ということから『英和对訳袖珍辞書』も『和蘭字彙』も「文幸」、「文學」を Grammar、Literature の両義で使っており文法と文学が言葉として未分化だった<sup>1</sup>。

なお学の字の書体だが、『英和对訳袖珍辞書』刊本(文久2年版、慶応2年版)では「學」は使われておらず「幸」と「学」が使われている、ただし発見された手稿では「學」と「学」を使っていて「幸」は見当たらない。刊本で幸と学の使い分けに規則性が見られないので編纂者/校正者の裁量に委ねられていたようである。一方『和蘭字彙』では幸は使われておらず、學と学が使われているがここでも使い分けに規則性が見あたらない。

(b) 文法の意味の文語

『英和对訳袖珍辞書』で Grammar の次の見出し語は Grammarian であり、その邦訳は「文語幸者」である。Grammar と関係づけるなら「文幸者」ないし「文典幸者」となるはずだが、「文語幸者」となっており統一が取れていない。

ところで「文語」は文久2年版と慶応2年版ともに他の箇所には出てこない語である。しかし2007年に発見された『英和对訳袖珍辞書』の手書きの原稿(手稿)において、Case の邦訳語の一つである「詞ツカイ格」が「状態格 ステイト 文語ノ」へと朱で訂正されている注記の中に「文語」が出ており、この表現から文語は現在の文法の意味であることが分かる。

(c) 文法

Grammarian の次の見出し語 Grammatical の邦訳は「文法ノ」であり現代人に分かりやすい「文法」が出てくる。

<sup>1</sup> Hepburn (1867) は見出し語 *Bungaku* に文學の漢字を当て “Learning to read, pursuing literary studies, especially the Chinese classics” の意味としており Grammar の意味は無い。そして見出し語 *Bunpo* に文法の漢字を当て “Rule of composition, style of writing” の意味としている。また文典と文語に当たる見出し語は無い。

Grammar とその派生語 Grammarian, Grammatical の邦訳で文法を意味する語が「文孝、文典、文語、文法」となっており、同じ表現が一つも無いのがいかにも『英和对訳袖珍辞書』らしい特徴である。このように関連する派生語の邦訳語に統一性が欠けているのは『英和对訳袖珍辞書』の手稿が真っ赤に朱で染まっているのが示すように多くの人によって校正が繰り返されたのが一因であるが、それらの人々の英文法の理解が一樣でないことを示している。

なお (b) で述べた手稿が見出し語 Case の邦訳の一つを「状態格 アウスタテ 文語ノ」と朱で訂正している件だが、刊本である文久 2 年版と慶応 2 年版では「状態格 文法家ノ語」と変っている。このことから発見された手稿は最終稿ではなく、その後も校正がなされたのが分かる。さらに「文語」から「文法」への訳語の変化も興味を引く。

## 2.2 編纂者と語学力

『英和对訳袖珍辞書』手稿の校正の状況から編纂者の語学力の違いが伺えることを示す。そのことをもとに文久 2 年版の編纂者のチーム構成を検討する。

### 2.2.1 3 チームだった編纂者

刊本である文久 2 年版は、これまでの研究で Picard (1857) を底本としていることが分かっていた (岩崎克己 1935: 51、杉本つとむ 1981: 695)。そして 2007 年に発見された手書き原稿 (手稿) の中に英蘭辞書 Picard (1843) の見出し語の順の通りになっている用箋があることから編纂作業の途中で底本を Picard (1843) から Picard (1857) へ切り替えたことを筆者が明らかにした (三好彰 2007)。

さて上述した「状態格 アウスタテ 文語ノ」と朱で書かれた手稿は Picard (1843) に出ていないが Picard (1857) には出ている Carving-knife という見出し語があることなどから、底本を Picard (1857) に切り替えた後に行われた校正によるものである。

以上のことから Case の邦訳語の一つに最初に「詞ツカイ格」と訳をつけた人が居り、それに別の人が「状態格 アウスタテ 文語ノ」と朱を入れ、さらにこれを「状態格 文法家ノ語」に変えた三番目の人が居たということになる。

『英和对訳袖珍辞書』文久 2 年版の序文に名前が挙がっている千村五郎、箕作貞一郎 (手稿では別称の貞太郎)、竹原らが発見された手稿に名前を書き残している。その手稿は 4 枚の用箋であるが、これらはいずれも底本を Picard (1857) に切り替えた後のものであることが見出し語から確認できる。

ということで底本を Picard (1857) に切り替えた後から参加した千村、箕作や竹原らを一つのチームとすると前後に別のチームが居たことになる。以下では便宜上、最初の草稿を作り上げたのを A チーム、その校正をした千村等を B チーム、そして千村等の後に校正を行ったのを C チームと呼ぶことにする。

上述したことをこのチーム名を使って言い直すと、A チームが「詞ツカイ格」と訳したのを

B チームが「状態格 アキマツ」に変え、さらに C チームが「状態格 文法家ノ語」と直したわけである。

なお「詞ソカイ格」という邦訳語は『和蘭字彙』に出ているのだが B チームがこれを避けたこと、そして C チームが「文語」を嫌って「文法」にしたことに、これら 3 つのチームの人々の語学の理解度が見え隠れする。

## 2.2.2 3 チームの語学力の差

### (a) 校正の様子から見た 3 チーム

3 つのチーム・メンバーの語学力を校正状況から探ってみる。手稿の中で B チームのメンバーである千村、箕作、竹原が名前を書き残している 4 枚の用箋の先頭にある英語の見出し語は Boundless, Cart-wheel, Dab と Daisy であり、見出し語の総数は 175 語である。その内の 105 語（比率では 60%）に朱が入っており、さらに刊本の文久 2 年版では 100 語（比率では 57%）が改訳されており手稿での校正の後にも大幅な校正がなされたのが分かる。このことから A チームよりも B チームの方が英語力が高く、C チームは B チームよりもさらに英語力が高かったと考えられる。つまり 3 つのチームがリレー方式で邦訳語のレベルを高めていったと考えて良さそうだ。

### (b) 語学力の差が出ている邦訳の例

語学力の差が分かる例を示す。最初の例は A チームが英語 Dangle の邦訳の 1 つを「スリングル」ニテ石ヲ投ル」としている件である。Picard 辞書が Dangle に対するオランダ語訳として slingeren を与えているので、それをもとに『和蘭字彙』を引くと「スリングル」ニテ石ヲ投ル」と「ユサブル」の両義あることが分かる。このうちの前者を取ったわけだが英語 Dangle に「石を投げる」という意味はない。B チームは「スリングル」ニテ石ヲ投ル」を止めて、英語 Dangle の意味を知って「動揺スル」と訳し直している。A チームより B チームの方が英語の力が上がったことを示す一例である。

次に英語 Dioptics を取り上げると、A チームは「光線ヲ破ル」ノ学問」としているが光線は破ることができないので何を意味しているのか不明である。B チームは「光線の学問、光線」と訳しなおして前進したが、それでも Dioptics の意味を理解していたとはいいがたい。C チームが「光線の屈折学」と現在でも使われている訳語に改訳しており、Dioptics を理解できていたことが分かる。これは C チームの語学力が他のチームより高いことを示す例である。

## 2.2.3 3 チームの構成メンバーの推定

B チームのメンバーで手稿に名前を書いて朱を入れている千村と竹原は校正を行っている時点で蕃書調所の英学句読教授だったのでこのチームは英語の中堅者だったと推定する。

なお A チームが訳した Equestrian の邦訳の 1 つに「ナイト」ニ付テ居ル」と英語の「ナイト」(knight) が入っていることから、2.2.2. (b) で上げたオランダ語を通して訳をつけた蘭学の心得のある人のほかに英語の知識を持っている人がメンバーに居たことを知っておく必要がある。

しかし B チームとの英語力の差を考えると蕃書調所の英学世話役相当の若手だったと推定する。

C チームは B チームより語学力が高いことと、そして後述するように辞書の前半と後半を担当する 2 組だったとみなせるので英学教授相当の実力者二人だった、つまり最終段階に真打が登場したと考える。この中の一人が本辞書の編纂責任者として序文を書いている堀達之助であろう。堀達之助が最初から邦訳語作りに参加していれば、B チームと C チームは用箋が朱に染まるほどの大幅な改訂をする必要はなかったことだろう。

## 2.3 邦訳語「文孝、文学、文典、文語、文法」の分布状況

『英和对訳袖珍辞書』文久 2 年版で文法の意味で使われている文孝、文学、文典および文法の 4 語が辞書のどの箇所に出ているのかを洗い上げて示す。

### 2.3.1 邦訳語「文孝、文学、文典、文語、文法」の出てくる語の総ざらい

#### (a) 文孝

文法の意味の「文孝」は上述した見出し語 Grammar のほかには、Liberal Arts の邦訳語「七藝」の注の中に出ている。

さらに「文孝ノ語」が次の 5 語の英語の見出し語に対する邦訳語の注の中に出ている。

Declension, Decline, Genitive, Intransitive, Metonymy(ママ)

#### (b) 文学

「文学」は上述した Genitive の邦訳語の注の一箇所だけであるが、「文学ノ語」という註が Gender の邦訳語の一つに「性 文学ノ語」として出ている。

#### (c) 文典

「文典」は上述した Grammar の邦訳語のほか、Personal と Prosody の邦訳語に註として出ている。

#### (d) 文語

「文語」は上述した Grammarian の一箇所だけである。

#### (e) 文法

「文法」は邦訳語として出てくるものと邦訳語の註に出てくるものが以下のように多数ある。

(e-1) 邦訳語への註ではなく邦訳語の中に「文法」が出てくるのは次の英語の見出し語 (4 語) である。

Grammatical, Grammatically, Ungrammatical, Ungrammatically

(e-2) 邦訳語の註に「文法」が出てくる英語の見出し語は下記のように 27 語ある。

・一番多いのは「文法家の語」であり、次の 15 語である。

Adversative, Appellative, Article, Case, Comparative, .

Conjugate, Conjugation, Conjunction, Dative, Discretive, .

Enallage, Epicene, Impersonal, Impersonally, Interjection

・次の7語には「文法ノ語」という註が付いている。

Affix, Participle, Pointing, Preposition,  
Preterperfect, Preterpluperfect, Transitive

・Particle と Tense に「文法ニテ・・・」という註が付いている。

・Inflection, Participial, Subjunctive にはそれぞれ「文法書ノ語」、「文法書ニテ」、「文法詞」という註が付いている。

### 2.3.2 文法を意味する5つの語「文孝、文学、文典、文語、文法」の分布状況

『英和对訳袖珍辞書』は24ページ分を一度に印刷したことが知られている(杉本つとむ 1981: 703)。全体で953ページなので24ページの束が40あるが、その番号が各束の先頭ページの下段に印字されている。そこで束の番号の1から20までを本辞書の前半部、21から40までを後半部として、文法を意味する5つの語「文孝、文学、文典、文語、文法」を邦訳語に持つ英語の見出し語が前半と後半にそれぞれいくつあるかを示したのが表2.1である。

表2.1から「文法」が多用されているのが分かる。2.1(a)で述べたように文孝にGrammarとLiteratureの両義があつて分化されていないこと、および2.1(c)で述べたように校正の段階で「文語」が「文法家ノ語」に変っていることから幕末がGrammarを文學(学、孝)、文語から文法へ邦訳語を移行する時期だったのかもしれない。さらに検討したい。

表 2.1 文法を意味する邦訳語を持つ英語見出し語の分布

	前半	後半
文法	23	11
文孝	5	0
文学	6	0
文典	1	2
文語	1	0

さて表2.1で多様さが目立つのは「文法」であるが、詳細に見ると「文法家ノ語」や「文法ノ語」などと書き分けられている。それで邦訳に「文法」を含んでいる英語の見出し語の数を「文法」を含んだ表現にそつて詳細に分類し直して表2.2に示す。

表2.2で一番出現頻度の高い「文法家ノ語」が辞書の前半部にだけ出ているので前半部と後半部で辞書編纂者が別人であつた、つまりCチームは2組だったと考えられる。

表 2.2 文法を邦訳語に持つ英語見出し語の分布

	前半	後半
文法家ノ語	19	0
文法ノ語	1	6
文法ニテ	1	2
文法ト	0	2
文法書ノ語	1	0
文法書ニテ	0	1
文法ノ	1	0
文法詞	0	1

ところで蘭学者の伊藤圭介が文久2年3月17日付の日記に次のように書いている (土井康弘 2005: 389) :

此節ピカルトの英語字彙蕃書調所に而出板  
 右半ハ出来居候由  
 右物産之名物検査仕居候

ピカルトの英語字彙とは『英和对訳袖珍辞書』のこととしてよく、この時点で半分だけ版木が出来ておりゲラのチェックを行っていると思なせる。つまり辞書の編纂作業の最終段階のCチームは前半と後半を担当する2組であったことがこの記事からも推測できる。

そして文久2年版の後半部には文法の意味の「文孝」と「文語」が出ていないことや、後半部で「文法ノ家」が使われていないことはCチームが前半部と後半部で担当者が別人であったことを示す具体例である。

### 3. 品詞の名称

『英和对訳袖珍辞書』では英文で綴られた序文に続いて辞書の中で使われている英語の略号の説明が畧語ノ解と題して書かれている。ここでは畧語ノ解に書かれている品詞の名称について論ずる、先ずその略号とともに表 3.1 に示す。たとえば現在の形容詞を形容辞とするなど語尾を詞でなく辞で統一している。

表 3.1 品詞の略号

略号	adj.	adv.	art.	conj.	interj.	prep.	pron.	s.	v. a.	v. n.
品詞名	形容辞	副辞	冠辞	接續辞	間投辞	前置辞	代名辞	實名辞	他動辞	自動辞

#### 3.1 品詞の英語名称の略号



畧語ノ解の英語品詞の略号は底本である Picard (1843)、Picard (1857) に準じているが、Picard 辞書は他動辞（現在の他動詞）と自動辞（現在の自動詞）の区別を明示していない。しかし過去形と進行形の綴りを書いているので動詞であることは綴りから分かる。

英語では1つの動辞（動詞）が他動辞と自動辞になることがある。この場合オランダ語も他動辞と自動辞で綴りが変わらないから英蘭辞書である Picard 辞書は他動辞と自動辞を区別していないのだろう。しかし日本語では他動辞と自動辞で表現が異なるから両者を区別する必要がある。このことに幕末の英学者が気付いていたわけである。

### 3.1.1 手稿における英語の略号

『英和对訳袖珍辞書』の手稿において品詞の英語の略号で畧語ノ解の略号と違っているのは間投辞、他動辞と自動辞であり、その他の品詞の略号は同じである。

#### (a) 間投辞（現在の間投詞）

発見された手稿では間投辞の略号が interj. になっておらず、int. としているのが2語 (Dickens, Fie) と intj. になっているのが1語 (Fiddle-stick) ある。手稿でこれら3つの略号に朱が入っていない。

#### (b) 他動辞と自動辞

手稿では他動辞と自動辞の区別を畧語ノ解と同じように v. a. と v. n. で区別しているほかに、a. と n. さらに va. と vn. を使っているものがあり不統一である。

A チームではこれらの3種が入り混じっている。そして B チームが朱を入れている用箋では v. a., v. n. と a., n. の2種が入り混じっている。

### 3.1.2 文久2年版の刊本における英語の略号

#### (a) 間投辞（現在の間投詞）

interj. (間投辞) が int. になっているのが5語 (Dickens, Ecod, Egad, Encore, Hurrah) ある。全体で66語の間投辞が出ている中の5語なので目くらまを立てることでないのかもしれないが、これらの5語はいずれも辞書の前半部の語である。

3.1.1 (a) で述べた手稿の状況から Fie と Fiddle-stick の略号が C チームによって interj. に変更されたのが分かる。

#### (b) 他動辞と自動辞

他動辞と自動辞をそれぞれ v. a. と v. n. とし辞書全体の中で統一的に区別している。3.1.1 (b) で述べたように B チームの段階では統一されていなかったから C チームで統一したわけである。

#### (c) 繰り返し表記の工夫

Picard 辞書では“一”を繰り返し表記の記号に使っている。たとえば「Thank」という動詞の原形を過去形と進行形とともに、「Thank—ed—ing」と書いて—で「Thank」を代行している。これはポケット型辞書であるために字数を減らす工夫である。

『英和对訳袖珍辞書』では—をハイフン(-)に置き換え、さらにその前の空白部を省いた上で他動詞(辞)と自動詞(辞)の略号を入れて「Thank-ed-ing, v. a. et n.」と書いている。ここで v. a. et n は「Thank」が他動詞の場合と自動詞の場合の両方があることを示しているのだが、このように品詞の略語を付け加えても Picard 辞書より字数が増えていないのが工夫の妙である。

動詞だけでなく、1つのエントリーに複数の派生関係にある単語を並べた場合や例文にもこの繰り返し表記が採られている。しかしこの表記法は英語の初心者に分りにくい場合があることを意識したのであろうが『英和对訳袖珍辞書』では一部について繰り返し表記を止めている。その1例を挙げると次の通りである。

Picard 辞書 Bondman, —servant

文久2年版 Bondman, bondservant

このように文久2年版では一部ではあるが—を止めていて初心者に分りやすい。この改訂は一部だけなので編集担当者の裁量で行われたと思われる。

### 3.2 品詞の邦訳語

#### 3.2.1 『英和对訳袖珍辞書』畧語ノ解と『和蘭字彙』との品詞の訳語

通説では『英和对訳袖珍辞書』の邦訳語が『和蘭字彙』のそれと類似している度合いが高いとされているので、『英和对訳袖珍辞書』が序文の直後であって本文の直前のページに「畧語ノ解」として品詞の英語の略語とともに与えている品詞の邦訳語と『和蘭字彙』のそれとを比べて表 3.2 に示す。

表 3.2 『英和对訳袖珍辞書』(E と略す)と『和蘭字彙』(O と略す)の品詞名称比較

E	形容辞	副辞	冠辞	接續辞	間投辞	前置辞	代名辞	實名辞	他動辞	自動辞
O	虚静詞	形動詞	發聲ノ詞	接統詞	歎息詞	前置詞	代名詞	實静詞	動他詞	自動詞

表 3.2 で上段 (E) が『英和对訳袖珍辞書』であり、下段 (O) が『和蘭字彙』である。前者の語尾が辞であり後者が詞であり異なっている。そして語幹で一致しているのは接統、前置、代名、自動の4つだけである。

『和蘭字彙』では實静詞と虚静詞、動他詞と自動詞の対比や發聲ノ詞など文法理論の先駆者である志筑忠雄(中野柳圃)の流れを組んでいると受取れる(松田清 2007)。

これに対して『英和对訳袖珍辞書』では品詞名称の語尾を辞で統一しており、辞を詞に置き換えると現在の学校文法の用語と同じである。これらは志筑忠雄より後の時代の名称である。このように『英和对訳袖珍辞書』と『和蘭字彙』の品詞の命名法は考え方を異にしている。

### 3.2.2 『英和对訳袖珍辞書』の本文中での品詞の邦訳語

『英和对訳袖珍辞書』文久2年版の本文中での品詞の邦訳語を畧語ノ解の順に総ざらいする。

#### (a) 形容辞

本文中に形容辞は出て来ず、見出し語 *Adjective* と *Adjectively* の邦訳の中に形容詞が出ている。

また手稿では *Demonstrative* の朱書き訂正記事に「指示ノ…形容詞」として形容詞が出ている。ただし刊本ではこの註の「…形容詞」は削除されている。

#### (b) 副辞

本文中に副辞は出て来ない。副詞が見出し語 *Adverb*, *Adverbial*, *Adverbially* の邦訳の中に出ており、さらに見出し語 *Out* の邦訳語の註に出ている。

また *On* の邦訳語の註に副詞の意味で副字が出ている。

#### (c) 冠辞

本文の最初の見出し語は *A* であるが、その邦訳語に「不定冠辞ニシテ（後略）」として冠辞が出てくる。一方、見出し語の *Article* と *The* の邦訳語の中に冠詞が出ている。

#### (d) 接續辞

本文中の見出し語 *Particle* の邦訳に接續辞とは書体の異なる接続辞が出てくる。そして見出し語 *Conjunction* の邦訳に接属詞が出てくる。

#### (e) 間投辞

本文中に間投辞は出て来ず、見出し語 *Interjection* の邦訳に間投詞が出てくる。手稿の見出し語 *Dickens* の朱書き訂正記事に嘆息詞が出ている。なお本文と手稿に嘆息辞、歎息辞、歎息詞は出ていない。

#### (f) 前置辞

見出し語 *Particle* の邦訳の註に辞の書体が異なる前置辞が出ており、見出し語 *Preposition* の邦訳に前置詞が出ている。

#### (g) 代名辞

本文中に代名辞は出て来ず、見出し語の *Pronominal* と *Pronoun* の邦訳に代名詞が出ている。

#### (h) 實名辞

本文中に實名辞は出て来ず、見出し語 *Substantive* の邦訳は實名詞になっている。そうして見出し語 *A* と *Apposition* の邦訳に名詞、見出し語 *Mine* の邦訳の註の中に名辞、見出し語 *Noun* の邦訳は名辞、見出し語 *The* の邦訳の中に実詞がそれぞれ出ている。

このように狭義には同義である6つの言葉（實名辞、實名詞、名詞、名辞、名辞、実詞）が混用されている。3チームがリレーして『英和对訳袖珍辞書』の編纂に当たったことを2.2で述べたが、延べて少なくとも編纂者が6人だったことを示している。

#### (i) 他動辞と自動辞

本文中に他動辞と自動辞は出て来ず、他動詞と自動詞も出て来ないし動辞も出て来ない。

しかし動詞は下記の8つの英語の見出し語に対する邦訳の中に出てくる。

Conjugate, Conjugation, Gerund, Mood, Objective case, Off, Verb, Verbal

また見出し語 Nominative の邦訳に動詞の同義として働語が出ている<sup>2</sup>。

3.3 品詞についての考察

(a) 品詞の邦訳語について

3.2.2 で述べたことをもとに畧語ノ解と本文中の品詞の名称を対比して纏めたのが表 3.3 である。この表から明らかなように両方で書体を含めて符合しているのは冠辞だけであり、書体の差を不問としても符合しているものとして追加になるのは接續辞と前置辞の 2 つだけである。

表 3.3 畧語ノ解と本文中の品詞の名称の対比

畧語ノ解	形容辞	副辞	冠辞	接續辞	間投辞	前置辞	代名辞	實名辞	他動辞	自動辞
本文			冠辞					名辞		
				接續辞		前置辞		名辞		
	形容詞	副詞	冠詞	接属詞	間投詞	前置詞	代名詞	實名詞		
		副字						名詞		
								実詞		

3.1.2 で述べたように品詞の英語の略号では Interj. が Int. になっている 5 例を除いて畧語ノ解の略号と本文中の略号のすべてが合っている。しかし表 3.3 のように品詞に関する邦語訳は畧語ノ解と本文中でほとんど合っていない。それで本文中で品詞の邦訳語を統一する目的ではなく、品詞の英語の略号を統一するために用意したものを畧語ノ解として流用したのかもしれない。別の見方をすれば畧語ノ解の品詞の邦訳語を書いた人は本文の邦訳語作りに深く関わっていないと思える。

なお『英和对訳袖珍辞書』の英語部は活版印刷であり日本語部は木版印刷であった。活版印刷で植字を直す作業は比較的楽なので英語の略号はほぼ統一できたが、木版を彫り直さなくてはならないので邦訳部の統一は諦めたのだろう。ともかく畧語ノ解の邦訳部は木版を彫り終えてから書いたと考えられる。

(b) 品詞名の語尾の分布状況

品詞名の語尾は辞、辞、詞、字および語と多様であるが、これらが『英和对訳袖珍辞書』本文中の前半部と後半部の何箇所に出てくるかを分布状況として表 3.4 に示す。

<sup>2</sup> Hepburn (1867) は見出し語 Hataraki-kotoba に動詞の漢字を当て verb の意味としている。なお品詞名称でほかに採録されているのは Keiyoshi 形容詞だけである。

表 3.4 品詞名の語尾の字（辞、辞、詞、字、語）分布状況

	詞	辞	辞	字	語
前半部	10	1	0	0	0
後半部	7	2	2	1	1

表 3.4 に示すように前半部は 1 つを除いて詞である。そして後半部は 5 種（詞、辞、辞、字、語）とばらついている。

表 2.2 で「文法家ノ語」が前半部だけで使われており表 3.4 では前半部で語尾に詞が集中的に使われていることから、前半部には用語の統一の意図が見える、そして後半部はこれらが多様であるため編纂者の裁量に任されていたと考えられる。

そして畧語ノ解では品詞の語尾が辞で統一されているので、畧語ノ解を書いた人は前半部ではなく後半部に関わったようだ。

なお慶応 2 年版の英語の序文に堀越亀之助は the conjugation of irregular verbs の表を付け加えたとして述べているが、その表には日本語で不規則動辞表と書いてある、つまり動詞でなく畧語ノ解の筆者と同じように動辞と書いていることに注意しておきたい。

#### 4. むすび

『英和对訳袖珍辞書』において文法のごく周辺の邦訳語にさえ固定的な邦訳がなく揺れ動いている。このことは『英和对訳袖珍辞書』の編纂に参加した人々の英語に対する理解および言語学理論の理解が一様でなかったことを示している。

2007 年に発見された手稿は朱で染まっており校正の状況が生々しく伝ってくるが邦訳語の改訂の状況から考えて『英和对訳袖珍辞書』の編纂者は 3 チームであり、英語力の高いチームへと順にリレーしながら完成度を高めて行ったと考えられる。

以上

#### 参考文献

- 土井康弘 (2005) 『日本初の理学博士伊藤圭介の研究』東京：皓星社。
- Hepburn, James (1867) 『和英語林集成』(A Japanese and English dictionary, with an English and Japanese index) 横浜：出版社不明。
- 堀 達之助編 (1862) 『英和对訳袖珍辞書』江戸：洋書調所。
- 堀孝彦・三好彰編著 (2010) 『解説『英和对訳袖珍辞書』原稿 初版および再版』鎌倉：港の人。
- 堀越 亀之助編 (1866) 改正増補『英和对訳袖珍辞書』江戸：開成所。
- 岩崎克己 (1935) 『柴田昌吉伝』東京：岩崎克己。
- 桂川甫周編 (1858) 『和蘭字彙』安政 5 年 [1858] 跋 江戸日本橋通：山城屋佐兵衛。

- 松田清 (2007) 「志筑忠雄における西洋文法カテゴリーの受容」『蘭学のフロンティア志筑忠雄の世界』: 65-70. 長崎: 長崎文献社.
- 三好彰 (2007) 「新発見『英和对訳袖珍辞書』の草稿および校正原稿の考察」『英学史研究』40: 87-103.
- 三好彰 (2008a) 「『英和对訳袖珍辞書』の底本の編纂者 H. Picard」『英学史研究』41: 57-67
- 三好彰 (2008b) 「『英和对訳袖珍辞書』と『和蘭字彙』の関係」『日蘭学会会誌』33(1): 39-52.
- 三好彰 (2009a) 「『英和对訳袖珍辞書』における英語翻訳の考察」『英学史研究』42: 105-118.
- 三好彰 (2009b) 「袖珍サイズの『英和对訳袖珍辞書』を発見」『日本古書通信』75(10): 4-7.
- 三好彰 (2010) 「『英和对訳袖珍辞書』の書誌学的研究」『東日本英学史研究』9: 34-37.
- 三好彰 (2011) 「宮崎元立と英学」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』5: 34-43.
- 森岡健二編著 (1960) 『近代語の成立 明治期語彙編』東京: 明治書院.
- Nagashima, Daisuke (1993) Bilingual lexicography in Japan: the Dutch-Japanese to the English-Japanese Dictionary. *World Englishes* 12(1): 249-255.
- 名雲純一編 (2007a) 「英和对訳袖珍辞書(文久二年江戸開板)原稿二十一枚(ママ) 改正増補英和对訳袖珍辞書(慶応二年江戸再板)原稿六十一枚」名雲書店ニュースボード第六十八号、高崎: 名雲書店.
- 名雲純一編 (2007b) 『英和对訳袖珍辞書 原稿影印』高崎: 名雲書店.
- 日蘭学会 (1994) 『オランダ語辞典』東京: 講談社.
- Picard, H. (1843) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages: remodeled and corrected from the best authorities*. Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.
- Picard, H. & Maatjes, A. B. (1857) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages, 2nd ed., rev. and augm. by, A.B. Maatjes*. Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.
- 杉本つとむ編 (1981) 『江戸時代 翻訳日本語辞典』東京: 早稲田大学出版部.

## Some Considerations of Grammar-related Japanese Words in the First English-Japanese Dictionary Published in Japan in 1862

Akira Miyoshi

**Keywords:** English-Japanese dictionary, grammar, part of speech

### Abstract

Grammar-related Japanese words in the first English-Japanese Dictionary published in 1862 show that compilers of the dictionary had a diversity of linguistic experiences, because most of the words are given in mutually unrelated expressions. Repeated revision of translated Japanese words shows that the compilers consisted of three teams who worked in a relay.

(みよし・あきら)